

アジア太平洋の人をつなぎ学びを育てる

ACCU news

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

特集 今こそ考える 先生たちの国際交流……2

令和4年度ユネスコ活動費補助金「ESDの推進を担う学校及び教員のための評価手法開発事業」……6

SDGs実現を目指すユネスコ活動プラットフォーム共創事業……6

教師教育におけるネットワーキングの試み
～私的体験の省察を通して～……7

活動メモ……11

ACCU INFORMATION……11

No. **418**
2023年8月号



ACCU

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター 発行

今こそ考える 先生たちの国際交流



ACCUは「国際的な相互理解・多様な価値観に対する理解の推進」を目的に、初等中等教職員国際交流事業を20年以上継続実施しています。事業の主役は教育現場の「先生たち（教職員）」です。教職員は未来に触れられる存在であり、平和で持続可能な社会の創り手（子どもたち）を育成するキーパーソンです。「先生が変わる 子どもが変わる 学校が変わる 学びの場」をキーワードに、教職員が持つ未来への影響力や発信力に期待し、プログラムで得られた学びが子どもから学校、保護者や地域社会へ広がり、社会の変容につながることをめざしています。具体的には、プログラムに参加した教職員が対話を通じて交流相手国の多様な先生方の考え方・視点・文化に触れ、多様な価値観に対する理解が促進されるよう、教職員自身がチェンジメーカーとして変容していくことを狙いとしています。

本事業は日本と韓国、中国、タイ、インドの二国間の相互交流を目的に、教職員を日本から海外の教育現場に派遣するプログラムと、海外から日本の教育現場に招へいるプログラムで構成されています。これまでに延べ5,500名以上の教職員がこの事業に参加し、相互理解を深め各々の教育現場にインパクトを与えてきました。コロナ禍において対面からオンライン形式での交流に切り替えて実践してきた中、最近ようやく対面での交流が再開する兆しが見えてきました。こうした“交流の在り方”が大きく変わる過渡期である今、改めて本事業の在り方について考えます。

教職員国際交流事業の全体像

本事業の全体像を図の形で示しました。下から上に向かって次元が上がり、躍動的・有機的に広がっていくイメージです。主役である教職員は、校種・年齢・経験年数・役職・モチベーション・性別・地域・宗教・教科など多様なバックグラウンドをもち、一人一人の学び・視点・経験・大切にしている価値観なども千差万別です。そうした参加者の“学びの多様性”を担保するため、複数のコンテンツをモジュール化し様々な活動の場を提供しています。

例えば「インプット」では、相手国の教育制度に関する講義や専門家の話題提供、「対話」では意見交換・質疑応答・フリートーク、「協働」では共同授業・授業研究・アクションプランの作成、「体験」では文化体験・教育文化施設や世界遺産の訪問等を行い、複数のモジュールが絡み合う複合的な要素のある活動が展開されます。また、SDGs・ESD・文化・ネットワーク・多様性・インクルーシブな学校づくり等のテーマに基づく活動を実践しています。

多様な文化が尊重され
平和で持続可能な
社会になる

海外協力団体の存在

国際交流を進めていく上で心強い存在となるのが、各国のパートナー団体です。コロナ禍という未曾有の事態においても継続した交流が可能となったのは、まさに、海外の協力団体・機関との強い信頼関係の下に協働し、様々な状況に柔軟に対応することができたからです。この連携・ネットワークは、ACCUが交流事業を展開する上で非常に重要な財産であり、強みです。今後も引き続き十分に連携しながら、創造的なプログラムをつくり出していきます。

協力団体のうちの
一つ、韓国ユネスコ
国内委員会の方々と



交流

国際的な相互理解促進・多様な価値観への理解

ネットワーキング

教育現場での国際理解促進

教育現場での国際交流活動の活性化

交流

発信・
成果普及

協働

体験

対話

インプット

様々な人と
対話する

国際的な
知見を得る

他国の考え方・
視点・文化に
触れる



本事業を通じた活動、国際的な学びの場において、プログラムに参加した先生は国を越えて一人の人間として出会い、対話を重ねていきます。そして、そこから得た学びをそれぞれが様々な場で広げていくことで、教育現場での国際交流活動の活性化や国際理解促進につながります。

また、過去の参加者同士が、プログラムを通して築いたネットワーク

をきっかけに、クラス間交流・学校間交流に発展させていくなど、交流後の継続的なネットワーキングの構築にも貢献しています。

このように、様々なレベルでの変容が促され、国際的な相互理解と多様な価値観への理解が進み、最終的には、多様な文化が尊重され、平和で持続可能な社会の実現へとつながっていくことをめざしています。

米原 あき先生

東洋大学
社会学部 教授

教職員の国際交流事業の意義とは？

専門は比較教育政策学、国際協力論、人間開発論、評価学、社会統計・調査。SDGsやESDなど人間開発に関わる取組の評価研究を行っている。著書に『SDGs時代の評価』（筑波書房）など。

学び・気づきの場づくり

今回、「教職員を対象とする国際交流事業だからこその意義」や「達成できること」について、以前より本事業にご協力いただいている米原あき先生をファシリテーターとしてお招きし、ACCU国際教育交流部のスタッフたちが改めて考えるワークショップを行いました。

米原先生：教育分野の国際交流は国と国との交流を人と人との交流に変える力があるとされています。国同士で抱えている政治的緊張などの難しいマクロな問題も、交流を通じて人と人との個人レベルになると簡単に飛び越えられる可能性を秘めているということです。

ACCUの取組は教職員に焦点を当てて

いますが、教職員は子どもや地域との関わりの中で学びの場やプラットフォームづくりに関与することができ、非常に多くの機能やチャンネルを持っています。そのような可能性を持つ教職員の国際交流は、一般的な交流事業以上の大きな影響力を持ち得るかもしれません。では、そんな教職員の国際交流事業だからこそできること、そして、それがもたらす価値とはいったい何でしょうか？

ACCU杉戸：過去の事業参加者から、「目の前の仕事に忙殺される中で、自らの価

値観や教育観など、重要なことなのに普段は落ち着いて考えることができない問題を（本事業のプログラムに参加することで）振り返る時間ができた」と言われたことが非常に印象に残っています。このような「余白」をつくる機会を提供することも本事業の価値ではないでしょうか。

米原先生：昨年の交流事業でも同様のコメントがありました。確かに「余白」を作ることは重要な要素ですね。

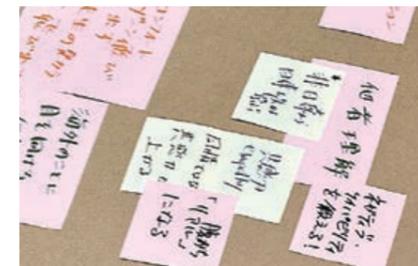
ACCU進藤：プログラムの中で海外との交流を通じ、日常を飛び出して新しい世界と触れ、非日常を経験するというのは非常に重要だと思います。普通の学校・教室に、今までは意識していなかったけれど確かに存在していた「多様性」への気づきが生まれるかもしれません。プログラムへの参加を通じてこれまで見ていた日常が違って見えるという点で、参加者である教職員が現場に戻ったとき、そうしたところに目を向けてくれるきっかけ、良い刺激になると考えています。

米原先生：交流を経験するとこれまでの

景色が違って見える——自分自身の変革（transformation）、とても大切なポイントだと思います。

ACCU進藤：一方で、オンラインでは互いの国を行き来する対面形式に比べると非日常感をつくることは難しいです。

米原先生：確かにそうですが、オンライン形式ならではの効果もACCUの過去のプログラムで見られました。本事業に対する関心は、実際のところ、教職員の間で温度差があることが多いですが、オンラインの場合は自身の学校内で交流するため、あまり関心の高くない先生も偶然その様子を目にする機会があり、それにより国際交流に対するハードルが下がったという声も聞きました。また、これはオンラインに限らず、担当教科が違い、関わりが少ない先生同士が、プログラムへの準備を通じて、協働してつながる機会を得たという声も聞きます。もしかすると、教科を超えた先生同士のコミュニケーションやつながりもACCUの交流事



キーワードから見えるもの

業が提供できる機会かもしれませんね。

ACCU杉戸：国内のネットワークづくりという視点で見ると、違う学校同士の参加者で仲間になったり、学校内での取組を他の同僚に向けて見える化したりという点も本事業の意義ではないかと思えます。

米原先生：プログラムが終わった後も国内外でのネットワークキングができるというのは貴重な価値ですね。近年、「社会に開かれた教育課程」の重要性が強調される中で、学校を社会とつなごうとする流れがありますが、学校としてはこれまで経験のないことを実践するのはちょっと怖いかもかもしれません。そうした中で、ACCUがプログラムを通じて多様なアクターとつながるきっかけを提供できるというのは大きな貢献だと思います。

ACCU杉戸：別の観点では、国際交流には様々なバックグラウンドを持つ参加者が集うからこそ「異質な他者」に出会う機会となり、その中で運営側が想定していないような即興的・偶発的な学びが期待できると思います。そうした意図しない学び・気づきも実は重要ではないでしょうか。

米原先生：「創発される想定外の学び」、まさにそれがこのプログラムの最大の強みかもしれませんね。そういう意味では運営側が意図的に新しい知識や教授法な



みんなで語り合う

どを伝えるだけでなく、参加者同士の交流の中から生まれるものを期待して、場をつくり、お題を出すだけに留め、結果としてどんな学びが生まれるか・生まれないかは寛容に受け止めるという姿勢が必要かもしれませんね。

ACCU伊藤：先生方には明確な「オチ」がない「すっきりしないプログラム」を経験していただきたいです。参加者がプログラムから何を学ぶのかはそれぞれ違うと思うので、その点は参加者に委ねて、自身で考える機会、「余白」をつくるのが交流事業のポイントかなと思えました。

*現行の学習指導要領において学校が社会と連携・協働した教育活動を充実させることが求められている旨が記載されている。
文部科学省、「社会に開かれた教育課程」, 2020
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2020/01/28/20200128_mxt_kohou02_03.pdf



これからの教職員国際交流に向けて

今回の米原先生とのワークショップを通じて「国内外の参加者のネットワークの構築」「参加者の余白づくり」「非日常の経験による日常の見方の変化」「偶発的な学びの創出」など、教職員を対象とする本事業だからこそ生み出すことができる様々な意義や価値を改めて見つけることができました。

本事業のキーワードである「先生が変わる 子どもが変わる 学校が変わる 学びの場」が示すとおり、その価値は教職員という周りへの影響力の大きい存在を対象とするからこそ発揮されるということを改めて実感することができました。さらに、それらは交流が対面かオンラインかという形式にと

られない価値ばかりではなく、例えばオンライン形式だからこそ生まれる意義など、様々な観点から浮かび上がったものでした。

今年度、ACCUでは新型コロナウイルス感染症が拡大する以前の2019年度以来、約4年ぶりに対面での交流を本格的に再開する予定です。コロナ禍以前の交流と同じ内容にそのまま戻るのではなく、オンラインを主体とした過去約3年間の交流の経験を踏まえて、今回のワークショップで発見した本事業の様々な価値をより明確に体现することができるようなプログラムづくりに励んでいきます。

令和4年度ユネスコ活動費補助金「ESDの推進を担う学校及び教員のための評価手法開発事業」*1

学校教員と共に歩んだESDの評価づくり

教育協力部 藤本 早恵子

ACCUでは、過去4年間にわたり、教員を中心とした実践者の方々及び有識者アドバイザーの先生方と共に、学校現場におけるESDの実践とその評価に関する事業を展開してきました。カリキュラム・教材開発に焦点を当て、「変容」と「エンパワメント」を軸に実践を検討するところから出発したこの事業は、その後、優れた実践を継続するためにはカリキュラムや教材をつくるだけでなく、実践に対する適切な評価のプロセスが欠かせないとの議論に発展しました。

以後、目指す児童・生徒像、教員像、学校像を議論し「ESDの評価」を具体的な形で提案するべく模索してきました*2。まず、児童・生徒評価の議論を中心に進め、アクションリサーチを踏まえて三つのモデル手法を開発することができました*3。そして最終年度となる令和4年度は、学校及び教員の評価について重点的に

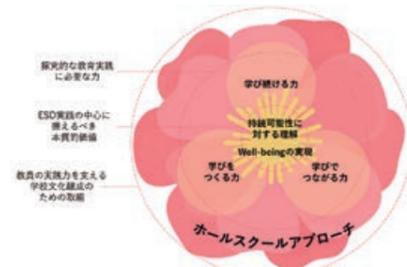
取り組みました。令和4年度の学校/教員評価づくりにおいては、既存の研究や他分野の実践も参考にしつつ、教員自らの課題意識に基づいて議論を重ね、「ESD実践力の向上」と「教職員や児童・生徒のウェルビーイングの実現」の二つの視点を盛り込んだ評価領域や評価指標を検討しました。

結果として、汎用性と現場感覚を併せ持つ本事業ならではの評価づくりができました。最終的にまとめた評価フレームワークは、今後国内外に広く発信し、普及を図ってまいります。

本事業に携わる中で、ご参加いただいた教員の皆様の熱量に感謝し、励まされ、ACCUとしても多くの学びを得ることができました。事業を通じて築いたネットワークを大切に、これからもESDの推進に貢献する方策と一緒に考えていけたらと思います。



評価指標を検討する議論にて



学校/教員評価の全体コンセプト

DATA
 実施期間：2019年5月～2023年2月
 参加者：日本の初等中等教職員、大学教員等の
 べ80名以上
 開催場所：オンライン、東京都 他

SDGs実現を目指すユネスコ活動プラットフォーム共創事業

ユネスコ活動の共創へむけて

教育協力部 若山 洋子

ユネスコ並びにユネスコ活動への理解促進と裾野拡大、国内ユネスコ活動の成果発信の機会創出を目的に「ユネスコウィーク2023」を開催しま

した。ウェビナー「ユネスコ職員に聞く～ユネスコ導入編」、国際ウェビナー「ユネスコ活動をつなぎ深める～国内外ユネスコ活動事例編」、国際シンポジウム「地域から世界へ～共創が生み出す新たな価値」のメインイベントからなり、地域のユネスコ活動を主導する実務者、教育関係者、ユースなど幅広い層の方々にご参加いただきました。



国際パネルディスカッション

「ユネスコウィーク2023」チラシ

ユネスコウィーク 2023
 テーマ：『地域から世界へ～ユネスコ活動を通じてつながる』

Day 1 2023年2月13日(月)
 ウェビナー「ユネスコ職員に聞く～ユネスコ導入編」
 時間：15:00-18:30
 言語：日本語のみ

Day 2 2023年2月15日(水)
 国際ウェビナー「ユネスコ活動をつなぎ深める～国内外ユネスコ活動事例編」
 時間：9:00-12:00
 言語：英語（同時通訳あり）

Day 3 2023年2月17日(金)
 国際シンポジウム「地域から世界へ～共創が生み出す新たな価値」
 時間：10:00-18:00
 言語：英語、日本語（同時通訳あり）

https://www.unesco-school.org/jp/2023/

ユネスコ 国際機関
 〒100-8302 東京都千代田区千代田1-1-1
 TEL: 03-3588-1111 FAX: 03-3588-2000
 E-MAIL: unesco@unesco.org.jp

DATA
 実施期間：2023年2月13日(月)、15日(水)、17日(金)
 参加者：165名(日本を含む11か国)
 開催場所：オンライン

*1 事業名は年度ごとに異なります。 *2 https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/2020/08/ACCU_text_SDGs.pdf
 *3 <https://www.unesco-school.mext.go.jp/wp-content/uploads/2021/03/henyou2021.pdf>
 *4 https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/2022/06/hyouka_2021_A3.pdf

教師教育における ネットワークの試み ～私的体験の省察を通して～

静岡大学大学院教育学領域教授 田宮 縁

静岡大学卒業後、一般企業に就職。静岡大学大学院へ進学し、修士(教育学)。静岡大学教育学部附属幼稚園教諭、常葉学園大学講師、同准教授、静岡大学准教授を経て、現職。環境との相互作用の中で総合的に学ぶことを研究の領域としている。2013年、所属大学のASPUnivNet加盟を機に、ユネスコスクール支援を開始。富士市総合計画策定委員など各種委員を歴任。



1. 背景と目的

(1) SDGs達成の担い手育成 (ESD) 事業

筆者が所属する静岡大学では、2019年度から文部科学省ユネスコ活動費補助金を受け、SDGs達成の担い手育成 (ESD) 事業「ESDを基軸とした質の高い幼児教育の推進と学校種間の接続」をテーマに、3年間、教師教育に関する研究を進めてきた。主な活動は、「全国幼児教育ESDフォーラム」の開催と「SDGsデジタル絵本」の制作である。本事業では「ともに創る学びの場」を基本コンセプトとし、事業主体だけでなく、参加者自らが場を創り上げていくプロセスを通して学ぶ方法、いわゆる、PBLを用いた。

【全国幼児教育ESDフォーラムのあゆみ】



幼児教育分野では初の全国フォーラムとなる2019年度は、全国より幼児教育から高等教育までの実践者・研究者、社会教育関係者などが集い、2日間に渡り、講演会、実践交流、トークセッションなどが行われた。2年目は、新興感染症への対応のため、質は保ちながら、対面での時間を軽減する方策として、デジタルプラットフォーム「ネットワークラボ」を開発し、事前にWeb上でバーチャルフォーラム(基調講演、実践報告のオンデマンド配信)を開催。当日は5分科会をハイブリッドで並行して実施するというユニークな開催方法を提案し、交流と発信の場を創出した。

最終年度もハイブリッドの開催ではあったが、会場・オンラ

インだけでなく、ポスター展示の場を設け、対面での参加者の交流も見られた。フォーラムの中では、各地で動き始めた新しいスタイルの教員研修会の実践が発表された。

例えば、静岡県教育委員会幼児教育推進室では、静岡大学教育学部との連携で、『保育プロセスの質 リフレクションシート』を作成、市町で活用支援事業を実施している。徐々に市町の人的環境等に合ったプログラムの相談や幼小中といった学校種間の学びの場として活用したいなど、想定以上の活用方法が寄せられ、その都度、幼児教育推進室と大学で協議し、活用研修のプログラムを再構築、提供している。また、富士市保育幼稚園課では、静岡大学への委託事業として「富士市教育・保育施設訪問支援事業」を展開している。大学教員が訪問し、保育参観後、園の課題に対して「オーダーメイド」な支援を行う仕組みである。

実践者である海老名恭子氏(静岡市立東豊田こども園園長、当時)からは、静岡大学教育学部が主催、静岡市立こども園が協力という役割分担で行われてきた「ユネスコスクールの遊びと生活展」について、その意義に気づいた各園の保育教諭の有志が、年に2回、ESDに関する研修会を開催するようになったと報告された。また、当日のポスターの展示には、「2021年保育者の主体的な学びがスタート」というタイトルが掲げられ、保育者自身が受動的な学びから主体的な学びに変化したことが述べられていた。さらに3回のフォーラムを受け、静岡市こども園課では、保育者の主体的な学びに注目し、サポートする体制を構築し始めた。

上記の例示のように、実践者の学びへの欲求を行政が受容し、場を創出し、大学が支援するという関係性が構築された。そして「全国幼児教育ESDフォーラム2021」では、教師エージェンシーが発揮できる教員の学びの場には、「楽しさ」「仲間」「活動」そして「場(プラットフォーム)」が不可欠であり、PBLという方法が有効であることが示された。

(2) 本論の目的

本事業に関わる多くの関係者が「いつの間にか巻き込まれた」と語っている。その背景には何があるのか。前項の例で示され

た実践者・行政担当者・大学教員の学びの内容は、それぞれの立場で違いはあるにしても「巻き込まれ」、エージェンシーを発揮していくプロセスに大きな差異はないと思われる。

本論では、16年前にESDに出会った筆者が、実践者として教師教育に巻き込まれていくプロセスを対象に省察するところから始めたい。筆者のESDに関する初期の実践を対象に、エンゲストロームの活動理論を背景として考察していくことを目的とする。

2. 実践の省察

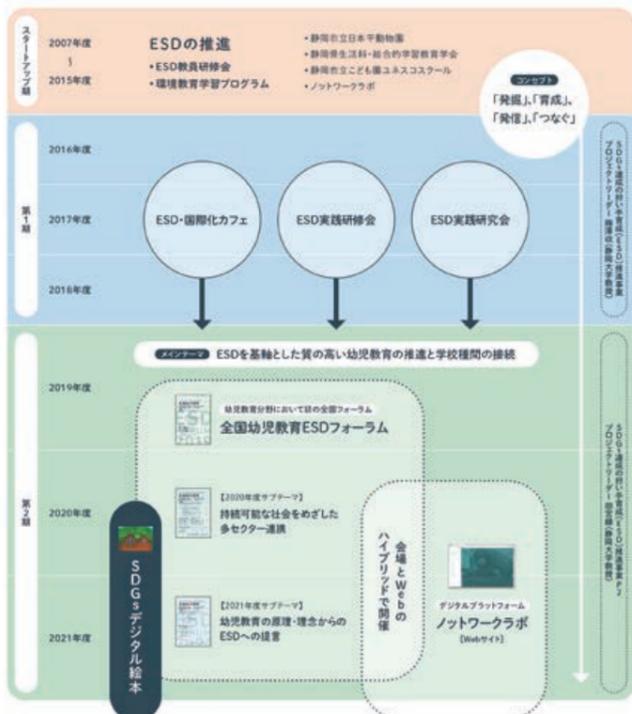
筆者の教師教育の実践は、下記の図のとおり3期に分けられ、本論での省察の対象となる実践は、スタートアップ期と第2期とする。

(1) 「直感」～静岡市立日本平動物園を舞台に

筆者とESDとの出会いは、2007年である。当時、勤務していた大学で「エネルギー環境教育」の視点での研究会が立ち上がり、その活動の一環で、ESDをベースに幼児教育分野からの教員研修会「食べてつながる命の輪 in Zoo」の実施とミミズコンポストシステムなど園内で取り組めるプログラムを立案、及び検証から着手した(角替ほか,2010)。

【「ESDを基軸とした質の高い幼児教育の推進と学校種間の接続」コンテキスト】

本事業は、多セクター連携によるSDGs達成の中核的な担い手となる教師教育の推進を目的としており、先生方が主体となり学ぶ場を創造し、先生同士や多セクターをつなぐ教材やプロジェクトを開発・提供してきました。



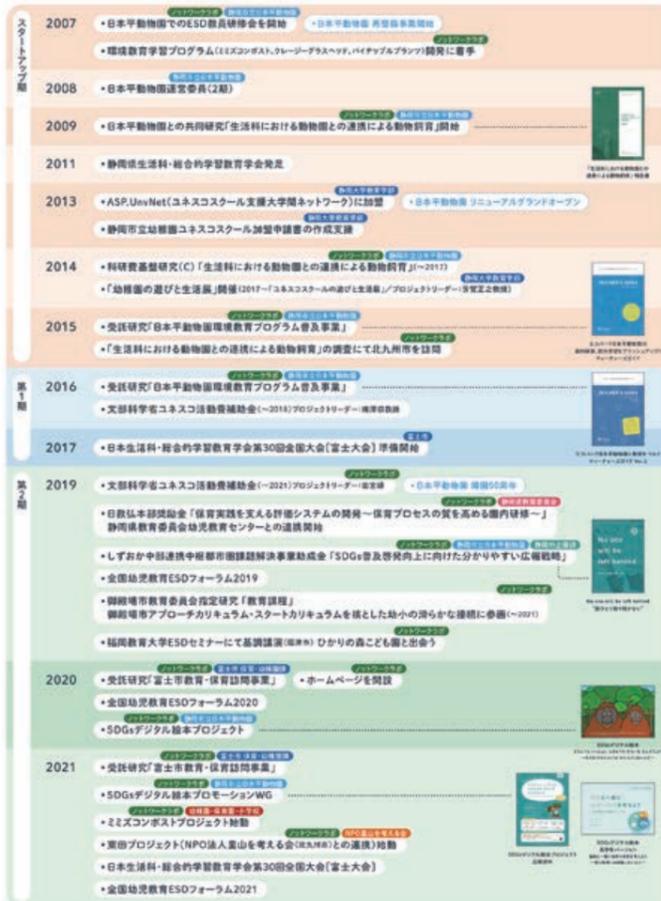
令和3年度 文部科学省ユネスコ活動費補助金
SDGs達成の担い手育成(ESD)推進事業(2)教師教育の推進

食物連鎖や命のつながりをテーマに、楽しみながら学べ、かつ、教員研修のプログラムが立案しやすい施設として動物園に注目し、まったく伝手もない静岡市立日本平動物園の扉を叩くところからスタートした。一方、動物園もリニューアル開始直前で、環境教育という視点からのソフト事業を模索している時期でもあったようで、双方の必要感が原動力となり、現在に至っている。

(2) 動機づけは「対象」の中に

初回の教員研修会は、動物園で飼育を統括されていた海野隆至氏を講師に、静岡市立幼稚園(当時)園長、主任を中心に参加者を募り、動物園内の会議室で行った。初回の内容は、出張動物園ガイドで行われている「草食獣と肉食獣」をテーマに、体のつくりの比較や体の機能の秘密について、頭骨標本などに触れながらの講義とリニューアル後の動物園についての講話、2回目は、別の受講者を対象に海野氏に園内を見学しながら解説を加えていただいた。動物を目の前に疑問に思ったことをそれぞれが質問し、内容が深まり、動物園、受講者の双方にとって満足度の高い有意義な研修会となった。一方、ESDという視点では、教員研修会のフィールドとして動物園を十分に生かされていないという感覚は拭いきれなかった。

【ネットワークラボの歩み】



この感覚は、筆者自身の動物園の知識が限定的だったこと、動物園との検討が不十分だったことに起因している。一方、知識や分業の制限が、課題意識を生み出し、さらなる活動の動機となった。動機づけは、「主体」ではなく、「対象」からもたらされるものなのかもしれない。

(3) 「空間」から「場所」へ

このような中、海野氏より日本平動物園運営委員就任への打診があった。運営委員会とは、地元住民代表、学校園代表、学識経験者、メディア、一般公募の市民などで構成され、動物園の運営全般に関する協議を行う場である。特に、リニューアルが開始される時期と重なり、駐車場の進入路の検討からプランディングに関することも審議された。また、展示動物が移動する前の新しい施設を見学させていただき、見せ方やバックヤードなど工夫についての説明も受け、一般の人が触れることのない動物園の裏側を知ることができた。また、Webサイトリニューアルのプロポーザル委員として審査に参画したり、園内ガイドやパンフレット作成に関しての意見を求められたりするなど、クリエイティブな部分での場に立ち合わせてもらう機会をいただくことで、日本平動物園への愛着は増していった。心地よく「巻き込まれていく」自分がそこにいたように思う。

それは、ちょうど、誰でも知っている言葉である「空間」と「場所」を比較したトゥアンの言説に近い感じだった。トゥアン(1993)は、場所(=安全性)に対しては愛着をもち、空間(=自由性)には憧れを抱いていると述べている。巻き込まれる前提には、自由度の高さが存在するのではないだろうか。トゥアン(1993)の言葉を借りるのならば、「自由とは、行動する力と、行動するための十分な空間的余地をもっているということの意味している」(p.196)ということである。この前提を基に、行動の有無は主体に委ねられており、その文脈に身を置き、夢中になって活動をする中で、「空間」が「場所」に変化していく。

動物園が筆者にとって「場所」となった時、なぜ動物園を教員研修会の対象にしたのかという輪郭がみえてきた。

(4) 「媒介物」の存在～コンテンツ制作

筆者は、受託研究「日本平動物園環境教育プログラム普及事業」に、2015年度、2016年度に取り組むこととなる。その成果として、ESDをベースとした2冊のティーチャーズガイドが刊行された。その冒頭では、動物園の存在の意味を以下のように示している。

- ①子どもたちにとって身近な施設であると同時に、大人にとっては生物多様性の保全や種の保存など地球環境規模での環境問題についての気づきを促す施設
 - ②本や映像で体験することのできない、動物たちのにおいや鳴き声を直接体験できる施設
 - ③いのちといのちの「つながり」(食物連鎖と生命の継承)を実感することのできる施設
- 動物園は、ローカルな施設でありながら、グローバルな視

点を与えてくれる施設であり、世代を超えて感性を刺激するフィールド、総合的に現代的な課題とその課題同士のつながりを学ぶESDにふさわしいということを伝えている。

これらのガイドブックは、「エコパーク日本平動物園の園外保育、校外学習をブラッシュアップ!」(2015年度版)、「エコパーク日本平動物園と教室をつなぐ」(2016年度版)をテーマとしており、ワークシートの原稿や解説も含んだ、教員を対象とした、いわゆる、ファクトブックとしての性格も帯びたものである。このガイドブックは、教員研修会や講演会などを通して、筆者と教員をつなぐ機会をもたらした。

(5) ESDを推進する「コミュニティ」

動物園と筆者との関係性は、海野氏の後任の柿島安博氏を中心に取り組まれた共同研究「生活科における動物園との連携による動物飼育」により、強固なものとなる。また、ほぼ同時期に、2021年に静岡県内で開催された日本生活科・総合的学習教育学会に向けて、静岡県生活科・総合的学習教育学会が設立した。さらに、2013年には、静岡大学教育学部がASPUnivNetに加盟、そして、静岡市立幼稚園ユネスコスクール加盟申請書の作成支援が開始された。翌年には、ユネスコスクール支援の一つとして、「幼稚園の遊びと生活展」が静岡大学の教授 芳賀正之氏を中心に開催される。のちの「ユネスコスクールの遊びと生活展」の発端となるイベントである。

以上のように、ESDという明確な目標の下、内発的な動機づけに基づいた人が集まる、いわゆるミッションオリエンテッドなアプローチが展開された。ここに集まる関係者は、定型の仕事ではない、インフォーマルで集団的な活動、目標を達成するプロセスの中に、自らの課題を見出し、自発的に集まってきていることを特徴としていた。「人々が生活の新たな形態を探し求め、格闘しながらそれを生み出していき、現実的な生活世界における学習」(Engeström,2008,p.2)を求めているということが徐々にわかってきた。

のちに、活動と活動が結びつき、一つのうねりを導き出すが、その芽はこの時期に出始めていた。例えば、ユネスコスクールである富士市立岩松北小学校の校長 和田精吾氏(当時)の快諾により、動物園からの受託研究は大きく進んだ。のちに和田氏は、日本生活科・総合的学習教育学会 全国大会の実行委員長として尽力され、全国大会は、筆者の想像をはるかに超えた活動に昇華していった。まるで、人や活動のピースが複雑に絡み合いながら、パズルの絵が浮かび上がってくるようだった。そのとき、筆者は、自らの手を心地よく離れていく感覚を覚えるとともに、自らのミッションを自覚するに至った。

(6) コンソーシアム事業のコンセプト

スタートアップ期の実践から「発掘」「育成」「発信」、そして、人と人や活動と活動を「つなぐ」という四つの要素を抽出し、これらをコンセプトに、2016年、文部科学省ユネスコ活動費補助金「SDGs達成の担い手育成(ESD)推進事業」(梅澤収平

プロジェクトリーダー、静岡大学教授、当時）が開始された。本事業は、梅澤氏が、ESD・国際化ふじのくにコンソーシアムを立ち上げるところから始まる。

(7) ESDを推進する教員研修会のスタイル

コンソーシアム事業のコンセプトに基づき、以下のようなESDを推進する教員研修会の3つのスタイルが構築された。

- ①ESD・国際化カフェ：実践者によるESDの報告と少人数での対話を中心とした研修会で、教員だけでなく、一般の方が参加されていることが特徴である。
- ②ESD実践研修会：実践者の問題意識から出発する学びの場で、実践報告とディスカッション、大学教員による講演を基本として、学外の会場で比較的大人数の研修会で、静岡県生活科・総合的学習教育学会、あるいは日本平動物園が協力、または共催という形で実施されている。
- ③ESD実践研究会：コンソーシアム事業の実施主体の問題意識に基づいた学内で行う小規模な研究会で、学外だけでなく、学生の参加を促すことが主な内容だった。

この3年間のESDを推進する教員研修会の新たなスタイルが基になり、第2期（2019～2021年度）の対話を重視した「ともに創る学びの場」とコンテンツ制作に発展していく。

3. 考察

筆者の私的体験の総括に入る前に、エージェンシーの発揮に、前提として大きく関わっている「自由」について考えたい。トゥアン（1992）の言及する「自由」には、「行動する力」だけでなく、行動しないという選択肢も主体に委ねられており、また、「行動するための空間的余地」とは、単に物理的な空間の広がりではなく、一定のルールの中で、主体がどのようにその空間を捉えられているかという心理的な側面に依拠しているものである。

さて、主体である筆者の動物園との出会いは、感覚的に物事を捉える「直感」からスタートしている。緻密な理論からの判断ではなく、主体の経験や興味、関心、楽しさ、好みなど感情的な部分の影響が大きい。一方、知識や分業の制限より、もたらされた教員研修会の不十分な感覚は、動機づけを主体に喚起させた。それは、コンテンツ（ティーチャーズガイド・マップ折りガイドブック『No one will be left behind』）制作という外的な活動へ転換する役割を担うこととなる。

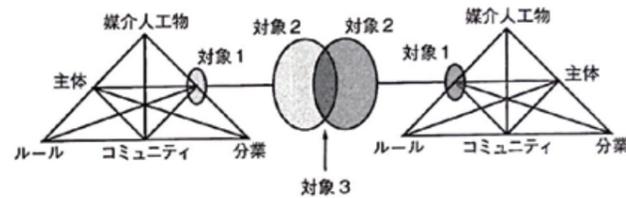
また、動物園が「空間」から「場所」へ変容していくプロセスでは、動物園についての認識や理解が不可欠であり、ここに主体の学びの中核があった。このように知の楽しみや喜びを得ることで、直感で飛び込んだ「空間」が「場所」へと変容していった。言い換えると感情的な側面から認知的な側面に重心が移動したとも言えるのではないだろうか。ただ、そこには、能力が未知数の主体に、それまでには実現しえなかった行動の可能性を引き出す場を与えた海野氏の判断があった。海野氏もまた自由に行動するだけの空間の余地があったことは言うまでもない。

活動を推進していくためには、組織外の専門性の異なる主体の「分業」の存在が欠かせないことも本実践から示された。

そして、これまでの反省と知見を生かした「媒介人工物」としてのコンテンツ制作とESDを推進する複数の「コミュニティ」が複雑に絡み合いながら活動が展開されていく。集团的力学も複層的に機能し始めた状況を筆者は次のように省察している。

人や活動のピースが複雑に絡み合いながら、パズルの絵が浮かび上がってくるようだった。筆者は、教員研修会そのものが自らの手を心地よく離れていく感覚を覚えるとともに、自らのミッションを自覚するに至った。（前述）

【第三世代活動理論のための「最小限二つの相互作用する活動システムのモデル」】
(Engeström, 2001, p.136)



出典：山住・エンゲストローム(2008, p.20)

エンゲストロームにより示されて「最小限の二つの相互作用する活動システムのモデル」のような対象を共有した主体（筆者以外の実践者）が複数存在する状況となり、それぞれの実践者がエージェンシーを発揮するようになっていく。

また、筆者のミッションは、当初の教員研修会の開催から「媒介人工物」を創り出すことにシフトしていった。「媒介人工物」が、まさに「全国幼児教育ESDフォーラム」、デジタルプラットフォーム「ネットワークラボ」の開設、「SDGsデジタル絵本」プロジェクトといった活動であり、トゥアンの述べている「空間」の創出だった。その「媒介人工物」が、「空間」から「場所」に変容した時、主体と主体が共有する「対象」となり、新たな価値の創造が可能となるのだろう。

以上、限られた紙幅で言い尽くせたとはいえないが、実践者がエージェンシーの発揮できる「空間」をいかに創出するかがESDにおける教師教育の要諦なのではないだろうか。

〈文献〉

- イーファー・トゥアン（山本浩 訳）（1993）『空間の経験』筑摩書房
- 角替弘志ほか（2010）東海圏の地域連携を重視したエネルギー環境教育学習プログラムの開発。常葉学園大学研究紀要（教育学部）, pp.276-287（田宮執筆分）
- 山住勝広、ユリア・エンゲストローム編（2008）『ネットワーク・結び合う人間活動の創造へ』新曜社
- 「全国幼児教育ESDフォーラム」報告書、コンテンツ等はすべて「ネットワークラボ」公開資料より閲覧可能である。
<https://knotworklab.com/data/>



韓国教職員招へいプログラム（オンライン）

①1/27(金)、31(火)、2/2(木)、4(土)、7(火)、9(木)、10(金)②文部科学省、ACCU
③東京都、千葉県、和歌山県、オンライン④37名

文化遺産セミナー 「高松塚古墳と東アジアの交流 — 調査研究の最前線から —」

①会場：1/29(日)、配信：2/13(月)～26(日)
②ACCU奈良、奈良県、天理市③奈良県、オンライン
④会場118名、オンライン37名

世界遺産教室（奈良県立大学附属高校）

①2/1(水)②ACCU奈良③奈良県④207名

ユネスコウィーク 2023 メインイベント 「地域から世界につながる～ ユネスコ活動を通じた新しい価値創造」

①2/13(月)、15(水)、17(金)②文部科学省、ACCU、UNESCO③オンライン④165名（日本を含む世界11か国）

全国ESDコンソーシアム/ ステークホルダー交流会 2023

①2/17(金)②奈良教育大学 ESD・SDGs センター
③奈良教育大学④外部主催につき未集計

ユネスコウィーク2023 テーマ別関連イベント 「ESD 評価フォーラム — 学校と地域の ESD 評価から、 持続可能な社会づくりを考える」

①2/23(木)②ACCU③オンライン④34名（日本を含む世界7か国）

ユネスコ未来共創プラットフォーム事業 第2回運営協議会

①3/7(火)②ACCU③オンライン④15名

ユネスコ未来共創プラットフォーム事業 第3回ワーキンググループ会合

①3/8(水)②ACCU③東京都、オンライン④10名

インクルーシブな地域づくり推進事業 フォローアップ会合

①3/9(木)～10(金)②ACCU③東京都、オンライン④7名（カンボジア、日本、フィリピン）

新時代の教育のための国際協働プログラム 「合同成果報告会」

①3/11(土)②文部科学省、ACCU③東京都、オンライン④ファシリテーター1名、登壇者5名、国内外オブザーバー54名

第5回ユネスコスクールオンライン 意見交換会

①3/23(木)②ACCU③オンライン④15名

専門家相談会（キックオフミーティング）

①4/28(金)②ACCU③東京都④5名

第1回ユネスコスクールオンライン 意見交換会

①6/7(水)②ACCU③オンライン④18名

ESD-Net 2030 Asia-Pacific Regional Meeting

①6/12(月)～14(水)②UNESCO Bangkok、

UNESCO Jakarta、インドネシア教育省③インドネシア④外部主催につき未集計

Educational Executive Development Program

①6/15(木)②タイ教育省③東京都④36名（タイ教育省教育行政官等）

第1回 ASPUnivNet 運営委員会

①6/19(月)②ACCU③オンライン④9名

文化遺産国際協力コンソーシアム 第43回東南アジア・南アジア分科会

①6/20(火)②文化遺産国際協力コンソーシアム③東京都、オンライン④外部主催につき未集計

ICCROM Asia-Pacific Regional Information Meeting

①6/26(月)②ICCROM③オンライン④外部主催につき未集計

世界遺産教室（奈良県立北高校）

①6/28(水)②ACCU奈良③奈良県④205名

インクルーシブな地域づくり推進事業 第1回地域会合

①6/29(木)②ACCU③オンライン④6名（カンボジア、日本、フィリピン）

ユネスコ未来共創プラットフォーム事業 第1回ワーキンググループ会合

①6/29(木)②ACCU③東京都、オンライン④12名

※一部2023年1月開始の活動を含みます

ACCU INFORMATION

ACCU news デジタル版のご案内

いつもACCUの活動を応援していただきありがとうございます。当団体の機関紙『ACCU news』は、次回419号よりデジタル版（PDF）をメインにお届けすることになりました。下記URL先にてぜひご覧ください！

また、同号以降、新刊発行の際にはACCUメンバー メールマガジン（メルマガ：月1回配信）のご案内いたしますので、この機会にメルマガの登録をよろしくお願いいたします。

●デジタル版(PDF)閲覧はこちら

https://www.accu.or.jp/works/library/accu_news/



●メルマガ登録(無料)はこちら

<https://forms.gle/MuyydZp5Sw362EDg9>



※印刷版の送付をご希望の方は、下記URL先より

お申込みください。

<https://forms.gle/cYXw5uRxnZnoi67V7>



※維持会員など一部の方には引き続き印刷版をお届けいたします。



デジタル版(398号以降)をACCU HPで公開中